

『小夜衣』論

——『しのびね』への〈反逆〉を中心に——

大倉 比呂志

はじめに

『小夜衣』に関して、かつて『小夜衣』論―雑居ビルの作品―（『学苑』二〇〇一・八―九）を発表したわけだが、中世王朝物語作品群の中で〈しのびね型〉⁽¹⁾と称される作品のモデルとなっている『しのびね』と『小夜衣』とを比較することによって、そこで顕在化させられている『小夜衣』の『しのびね』に対する〈反措定〉としての位置付けを中心に、いささか論述していきたいと思う。

一、〈継母〉と〈北の方〉の呼称をめぐる位相

按察使大納言（後に大臣・関白。以下、大納言と称する）の姫君（結婚した兵部卿宮の即位後、中宮。以下、姫君と称する）は母親の死後、母方の祖母尼上のもとで養育されていたが、父親によって〈継母〉に当たる〈北の方〉のもとに転居させられる。〈継母〉の初出は、姫君を恋慕する兵部卿宮（後に春宮・帝。以下、宮と称する）が姫君との情交後、尼上の住む山里を訪

れた尼上の姉の娘である宰相君に対して尼上が語った個所にあり、それは、

①「……（男女ノ仲ハ）世に隠れなきものなれば、（父親ノ）大納言のあたりにも聞き給ひて、継母などのたまはん事こそ、心憂けれ」⁽²⁾とて、ほろほると続き出づる涙に、……（上・四四）

と語られている。傍線部のように、姫君の男関係が〈継母〉に知られたら、どのように言われるのかと不安感におののいているのであり、山里を訪れた父大納言に対して、姫君を引き取って、『心やすくもてなし給へかし』（上・六〇）と発言しているごとく、傍線部「心やすく」ということばの中には、姫君が大納言邸に引き取られたならば、〈継子いじめ〉の可能性が考えられるから、充分に気を付けるようにとの尼上の危惧が内包されているのではなからうか。

ちなみに、本物語における〈継母〉の用例は引用文①も含めて十四例（上―一例、中―十一例、下―二例）であり、〈北の方〉の用例は三十三例（上―一例、中―十三例、下―十九例）である。

そこで、以下〈継母〉と称された例をあげてみることにする。

② げに、ただ人とはおぼえぬ(姫君ノ)有様を、大納言の外腹の娘などにやと、(帝ハ)おぼしめすにも、などこれ(姫君)を参らせざりけん、これは継母などの、我が娘なれば、かくは思ひけるにこそ、とおぼしめす。(中・九二)

③ (帝ハ姫君ヲ)御遊びがたきのやうにもてなし給ふれど、下の御心得は、人知れぬ(姫君ヘノ)御思ひのみ、日に添へては、えつつみがたくなりまさり給へば、いかならんと、おぼし乱るる。御ためは苦しからぬを、この人(姫君)のため、継母などいかにばかりさいなみ思はんと、いとほしくて、人目をせちにつつま給へる。御心のうちばかりに、(帝ハ)おぼし碎きけり。(中・九二―九三)

④ 「梅壺の御おぼえめでたくて、昼は日暮らしおはします」など(侍女タチガ)言ひあふを聞き給ふにも、宮は、まづ、御胸のみつぶれて、(梅壺女御ハ)いかにうつくしき娘ならん、かの人(姫君)にはまさらじものを、あはれ、これ(姫君)を迎へ寄せて、継母などの、母代にやつつけらん、さあらんにぞ、上(帝)もただにはおぼさじなど、あらまし事さへ今の心地して、(宮ハ)胸もせきあげられ給ふ心地して、……(中・九三)

⑤ 中宮も、「かの人(姫君)を迎へ寄せて、継母などの、母代につけたるやらん。なのめならずうつくしくて、琴・琵琶なども、『かかる物の音、いまだ聞かず』と、上(帝)も語り給ひつるは、その人(姫君)とこそおぼゆれ」と(宮ニ)仰せらるるに、……(中・九五)

⑥ 「など、さしも、祖母君の、放しがたげにおぼえたりしを、かかるべき事にや。(姫君ヲ)迎へ寄せて、思はずなる住まひこそ、心苦しく侍らん、など思ひつるに、行方なくなして、祖母君、いかに思ひ給ふらん、と思ひやらるるにも、かなしく」とて、(大納言ガ)うち泣き給ふに、継母、「さしもうつくしくおはしましつる人(姫君)なれば、内裏わたりの人も、いかでか、心かけ聞こえざ

らん。あらはれては、いかが、と思ふ人の、忍びやかに、さるたばかりをして、取りたるにこそあらめ。さもなき人ならば、いかがはせん。あるまじき人などにてやあらん。それぞ、あさましかるべき」など、わび給へるぞ、をかしき。(中・一一八―一一九)

⑦ 「いづくとも思ひ分きたるかた侍らず。思ひのあまりには、昔より憂きためしに申し伝へたる継母などのしわざにや、とこそ。置き所なきかなしさには、思はぬ事なく思ひ侍りて」など、(尼上ハ宮ニ)来し方・行く末の事ども語らひ給ふほどに、……(中・一二四)

⑧ (大納言ハ姫君ガ失踪シタメニ)迎へ寄せけん事のみくやくしく、ただほればれとこそ、思ひ乱れ給ふ。継母も、しえたり、と嬉しき中にも、……(中・一二九)

⑨ 「さもや侍らん。おほかたは、(帝ガ姫君ニ)御心かけさせ給ひけるとて、人の口やすからず、言ひ沙汰しければ、『継母などの、いかやうにしたるにや』とこそ、よそ人は申すなれ。あたらん」と(中宮ハ帝ニ)仰せらるれば、……(中・一三三)

⑩ 「(姫君ガ失踪シタ)その後は、『さしもしげく入らせ給ひし梅壺に、この頃は、おぼろけにては入らせ給はず』など、人々も申しあひて侍るなる。げに、これ(姫君ノ失踪)は、継母のしわざとこそおぼえ侍れ」など(宮ガ中宮ニ)申し給へば、……「げに、ありがたく侍りし琴の音、いまださやうの琴うけたまはらず。何事につけても、さばかりの人は、かたくな侍り。上の御心かけ給へるも、ことわりになん。もとより、出だし給ひけん継母こそ、はかなくおはしけれ。梅壺も、これほどにはおはしまさじものを。大納言、いかやうに(姫君失踪ノ件ヲ)聞き給ふらん。『この君(姫君)の、けしからぬ筋に、うせ給へる』とぞ、継母は申しなし侍らん」など(宮ハ中宮ニ)仰せらる。(中・

⑩ 上(帝)は、もし、宮の(姫君ヲ)取り隠してや、など思ひつるに、さる気色もせず、げに、継母のしわざにや、とおぼすにも、……(中・一三五)

③では帝が姫君に対する恋慕を露骨に示せば、継母は実の娘梅壺女御への帝寵が薄れたと思つて、姫君が継母にいじめられるのではないかと継子いじめを警戒して、傍線部のごとく、姫君への感情を抑制しているのだ。やはり、これも継母への不安感が語られているといえよう。

④では梅壺女御への帝寵を耳にした宮は、継母が姫君を梅壺女御の母代として付き添わせた結果、帝は姫君を見て恋慕するのではないかと想像しているのであるから、宮の心中は不安感で充滿しているのであり、姫君を母代として出仕させた継母に対する面白からぬ感情が語られているのだ。

さらに、帝の姫君に対する恋慕が梅壺女御の乳母子である小弁によって北の方に吹聴され、帝寵が姫君に移行することを恐れた北の方は自分の乳母子の民部少輔に姫君をだまして拉致させたのであり、⑦⑨⑩⑪は姫君失踪事件に継母が関与しているのではないかと、尼上(⑦)、中宮(⑨)、宮(⑩)、帝(⑪)が各々疑っているものであって、それらの嫌悪感・憎悪感が継母ということばに内包されているのではなからうか。

また、上巻冒頭において宮付きの女房たちが大納言の娘たちの噂をしているわけだが、尼上の姪に当たる宰相君(後に大納言北の方)が、

⑫ 『北の方のあさましく恐ろしき心もち給ひて、(姫君ノコトヲ)見じ、聞かじ、と思はれたるに(大納言ガ)つつみ給ひて、(姫君ノ)行方も知り給はずとぞ、うけたまはり候ふ』(上・八一九)

と語っており、尼上も山里を訪問した宰相君に対して、

⑬ 「大納言の姫君、父は行方も知り給はず、今日・明日も知らぬ者(尼上)に預け聞こえ給へるに、うち捨て侍りなば、昔より憂きためしにも申し伝へたる、まことならぬあたりにまじらひ給はん事ばかりぞ、黄泉路のさはりともおぼえ侍る」(上・一一)

と語っている根底には、継子いじめの不安が語られているのだ。さらには、姫君の失踪を知った尼上は北の方を『よからぬあたり』(中・一二〇、下・一六四)と言ひ、「母にて侍りし人の時より、北の方の恐しさは、思ひ知り侍りしかば、年頃も近づく事も侍らず」(下・一六三—一六四)と宮に語っており、姫君を幽閉したのは北の方ではないかと疑っている。とすれば、継母ではなく北の方という呼称であっても、それは身分上の問題であつて、好意的な意味合いで使用されているのではないのだ。すなわち、北の方という呼称の中にも嫌悪の対象という負性を帯びて用いられている点があることにも注意しておく必要がある。

ところで、下巻巻末近くで宮は帝となり、幽閉から解放された姫君は中宮となるわけだが、

⑭ かかりける御さいはひ人(姫君)を、むなしくなさんとかまへける継母の心こそ、いと恐ろしけれ。されば、わが身(北の方)も、あるにかひなき身になりはてぬるぞかし、とおぼゆ。(下・二〇七)

⑮ 腹黒・和讒もちたる人は、末までも、この世も後の世も、いかでかよかるべき。継母、あさましき有様、思ひやるべし。(下・二二一)

と語られている。引用文⑮の直前に「かまへて、人のためには、なざけあ

るべき事、と見えたり」という教訓的な言説が記されているわけだが、⑭において〈継母〉の恐怖が指摘されているのであって、〈継母〉という呼称は前述したごとく、負的表象の記号でもあったのだ。

一方、〈北の方〉の呼称の初出は、

⑯ 北の方、さるべからん人もがな、と思ふ頃なれば、かく(注―姫君が大納言邸に引き取られること)と聞き給ふに、嬉しくて、さらば、迎へ寄せて、姫君(注―入内することになっている実の娘)に添へばや、と思ひて、……(上・六一)

とあり、自分の娘の入内に際して、〈北の方〉は姫君を母代として使用したいと考えているのであって、家の管理者として〈北の方〉という呼称が用いられていると考えられる。また、

⑰ 対の君(姫君)は、かかる晴れ晴れしさを、つつましくて、ゐざり入り給ふを、北の方、「いかでかかくは」とのたまへば、……(中・九一)

とあるように、帝に応待しなければならぬ姫君が奥に引っ込もうとするのを叱責する〈北の方〉の呼称は、管理者もしくは監督者の意味として使用されているのであり、幽閉された姫君を救出しようとして、姫君付きの侍女である右近や小侍従に対して、民部少輔の妻が、

⑱ 「姫君ノ」かかる御事ども見奉るにこそ、いみじく心苦しく侍れ。なにとしても出だし奉らばやと、これのみ、この頃は、人の思ひを身にかけ侍りて、嘆き思ひ給ひ侍り。北の方は、『いつまでもかくて(姫君ヲ)置き参らせよ』とこそ侍るなれ。かくて年月を経させ給はん心憂さ』など言ふに、……(下・一

七一一―七二)

とあるのは、夫の民部少輔が〈北の方〉の乳母子である点を考えると、身分上の呼称として〈北の方〉が用いられていると理解されるのであり、

⑲ 父君の(帝ト自分トノ噂ヲ聞イテ)いかやうにか思ひ給はんずらん、我がけしからぬ心づかひとこそ、北の方(注)も言ひなし給はめと、(姫君ノ)とにかくにかきくらされて、……(中・一一〇)

は、姫君の心中思惟であるが、大納言の地位にある父の正妻という立場を尊重して〈北の方〉という呼称が使用されているのだといえよう。⁽³⁾

〈北の方〉という呼称の全用例を調査した結果、〈北の方〉の呼称は、主として管理者、身分的な上位者、大納言という地位にある者の正妻に対する敬意という意味で使用されているのであって、〈継母〉のように負的性格が内包されたものとして用いられている例は少ないと考えられるところから、〈継母〉と〈北の方〉という呼称がある程度区別されて語り分けられていると考えておくべきだろう。

二、〈報復〉と〈非報復〉

さらに、実の娘梅壺女御への帝寵が姫君に移行するのを阻止するために、帝や宮は〈北の方〉による姫君幽閉の指示があったのではないかと疑念を抱いていたにもかかわらず、〈継母〉は姫君の身の回りにいる父の大納言や宮からも何の〈報復〉も受けておらず、現在「浅茅が原に荒れはてたる」(下・一八五) 四条の家に自ら退却し、

⑳ 北の方は、見聞く人にとみはてられて、世には憂き名を流して、かくかす

かなる住まひになり行くも、我が身の咎におぼえ給ふ。(下・二〇〇)

とあるように、〈北の方〉は現在の悲惨な状況は自分のした悪事のせいだと反省はしているものの、〈継母〉の姫君への〈いじめ〉に対する〈報復〉は一切語られてはいないのだ。これは現存の改作本『住吉物語』や『苔の衣』における〈継母〉への〈非報復〉が語られているのと軌を一にしているものであり、『落窪物語』のように〈いじめ〉に対する〈報復〉が明確に語られている〈継子譚〉とは異なるのであって、そこに中世王朝物語における〈継子譚〉と平安物語のそれとの差異を読み取るべきだろう。以上のことから、〈継子譚〉における〈継母〉の〈いじめ〉に対する〈非報復〉のあり方は、中世王朝物語の特色の一つであるとも考えられよう。⁽⁴⁾

三、〈面影〉の意味

本物語には〈面影〉が十三例あり、それらは、

- ④ 道すがらも、唐撫子の五月雨にしをれたる夕映えの心地して、露けかりつる(姫君ノ) 面影めづらかにははれにて、(姫君ヲ) 見ざらましかば、と(宮ガ) おぼすにも、……(上・二八)
- ⑤ 霧の籬には、花の色々おもしろく見えたる中にも、かの山里の垣根続きに見えつる(姫君ノ) 面影(宮ハ) おぼし出でられて、……(上・五四)
- ⑥ らうたげなりし(姫君ノ) 面影は、「人を見るにも」と、(宮ハ) まづぞおぼし出でらるれば、……(上・五六)
- ⑦ 心にあまる涙を、さまざま、袖のしがらみせきあへざりつる(姫君ノ) 面影、めづらかなりつる琴の音など、(宮ハ) おぼし出づるに、……(中・七八)

⑧ (宮ハ) 結婚シタ関白姫君ヲ つくづくと見給ふにも、ありし(姫君ノ) 面影のみ思ひ出でられて、……(中・八四)

⑨ ありし(姫君ノ) 面影のみは、この世のほかになりぬとも、(宮ハ) 忘るべき心地もし給はず、……(中・九六)

⑩ もろともに(姫君ヲ) いざなひ出で、(姫君ガ) 見送り給ひし妻戸の方のみまばられ給ひて、ながめし有様など思ひ出づるにも、(姫君ノ) 面影今の心地して、(宮ハ) よよとうち泣かれ給ひぬ。(中・一〇〇)

⑪ 憂くつらくも思ひ続け給ひながら、また、かつ恨みてもなほ忘れぬ(姫君ノ) 面影は、(宮ノ) 心に離れ給はず。(中・一〇一)

⑫ 月はくまなく澄みのぼりて、薄雲すこしひきて、空の気色すこく心細げなるにも、見し(姫君ノ) 面影は今の心地して、恋しきにも、(宮ハ) 例の、人やりならぬ涙ぞこぼれぬ。(中・一〇五)

⑬ (宮ガ) おはしますたびには、行く末長き事のみ契り語らひ給ひし(宮ノ) 面影(姫君ハ) いつの時にか忘るべき心地もし給はず。(中・一〇六)

⑭ 宮は、うち臥し給ふべき心地し給はず、ありし(姫君ノ) 面影の、今の心地して住み給ひしところもなつかしく、ここかしこ見給ふに、……(下・一六五)

⑮ もろともに見し夜の(姫君ノ) 面影などおぼし出づるにも、さやかなる月影も(宮ハ) かきくらさるる心地し給ふ。(下・一六六)

⑯ 見し(姫君ノ) 面影の恋しさは、(自分ガ) この世のほかになりぬとも、(帝ハ) 忘るべき心地もおぼされず。(下・一八六)

とあるが、十一例までが宮が姫君の〈面影〉を想起する場面である。その中でも⑪は姫君が宮の〈面影〉を想起し、⑭は帝が姫君の〈面影〉を想起している場面であって、いわば例外的な二例であるわけだが、④のように、

宮が姫君と情交した後、宮が自邸に戻る途中姫君を想起する場面に表象されるごとく、〈面影〉の八割以上の用例が姫君に対する執着を語っているのだ。姫君が宮の〈面影〉を想起する用例は一例しかないものの、宮が関白姫君と結婚したために、姫君のもとを以前のように訪れることができなかった件は、次のように語られている。

① おなじ心に(宮ガ)おぼし出でば、この夕暮などは、おぼしも立ちなましなど思ふにも、待つ夜な夜なの暮れもむなしく過ぎぬれば、(姫君ハ)さすがに心細うながめられて、

さりともと心のうちは頼めども待つにむなしき数つもりけり(上・四七一
四八)

傍線部のように、姫君は宮の訪れが期待できそうにもないので、宮に対する恋慕を「さりともと」の独詠歌に封じ込めざるをえなかったのだ。また、姫君が大納言邸に引き取られる直前に、

② (姫君ガ)外をつくづくと見たし給へば、吹きまよふ木枯らしの音もいとど身にしみて、ありし曙のうちながめ給ひし(宮ノ)気色・有様、またいつの世に見奉るべき、など(姫君ガ)おぼし続けらるるにも、もののみかなしくて、(父邸へ)思ひ立ち給はんともおぼされず。(上・六三)

とあるごとく、姫君の宮への恋慕が語られており、さらに、姫君が失踪し宮の結婚した関白姫君の四十九日の喪が明けた後、山里を訪問した宮は姫君が障子に残した二首の歌を発見するわけだが、その中の一首「忘れぬ心のうちはうつつにて契りし事は夢になりつつ」(下・一六五)は、宮を恋慕する内容の歌であることが理解されよう。姫君の宮への恋慕に関して、

〈面影〉の用例は一例だけではあるが、このように、宮への恋慕に対して〈面影〉という語が用いられてはいないものの、別の表現で語られることによって、より強固な恋慕があぶり出されてくることになる。

ところで、姫君にとって辛酸をなめた幽閉事件があったものの、最初に情交した宮と再会し、最後には宮は帝に、姫君は中宮という、いわば頂点に昇りつめたわけである。二人は紆余曲折しながら、形式・内実ともに、幸福な状態に到達したという点から、〈幸福物語〉と考えることは許されよう。もちろん、姫君は大納言の娘であり、山里↓父大納言邸↓宮中↓幽閉↓山里↓宮邸↓宮中というように流浪したわけだから、〈貴種流離譚〉の枠組みの中で語られているが、終局的には恋慕する宮との再会後に、宮の即位に伴って中宮位到達という栄光の座を獲得したことで、姫君の立場は十全なものとなる。換言すれば、本物語は姫君が宮と再会することによって栄光の座を獲得していく過程が語られており、その点から考えると、宮と姫君との幸福に至る〈恋愛史〉だったのだといえよう。

四、『しのびね』への〈反逆〉

〈しのびね型〉の元祖である『しのびね』の骨格を神野藤昭夫は、⁽⁵⁾

- ① 男君が女君を見出し、幸福な生活に入ること。
- ② 男君と権門の姫君との結婚から、悲嘆の女君が出奔すること。
- ③ 女君が、恋心を深める帝と男君への慕情の板ばさみになって苦しみ嘆くこと。
- ④ 事情を知った男君が女君への恋情を断ち切って出家遁世を遂げること。
- ⑤ 女君は帝妃として世俗的栄耀を獲得し、のちに遺児若君は父入道と再会する

こと。

と述べている。これを『小夜衣』と比較してみると、決定的に異なるのが④であることは歴然としていよう。すなわち、『しのびね』に女君の外面的栄達と内面的悲哀という逆ベクトル関係が見られるのに対して、『小夜衣』では宮と姫君との再会後に、双方に外面・内面ともに幸福と栄達とがもたらされたのである。とすれば、『小夜衣』は『しのびね』に対して〈反措定〉の立場に立つ物語であったのだ。

ちなみに、『風葉集』における採歌状況を見ると、『しのびね』は三首採られているが、現存本にはなく、現存の『しのびね』は改作本であると考えられており、古本の状況は判然とはしないが、女君が帝の恋慕を拒否し、男君に対する思慕を強化させていく状況は古本の方が精細に語られていたのではないかと神野藤⁽⁵⁾は推測して、男君の出家をめぐる女君の思慕に照射したのが改作本である現存本ではないかと考えている。現存本『しのびね』の成立時期は一般的に南北朝時代と考えられているが、古本においても最後は男君と女君との双方が幸福になるという結末ではないらしく、『小夜衣』の結末とは対照的なのである。さらに、『小夜衣』の作中和歌は『風葉集』に採られてはおらず、成立も未詳であるが、阪本龍門文庫蔵本・宮内庁書陵部蔵乙本・多和文庫蔵本・静嘉堂文庫蔵乙本・川越市立図書館蔵本・無窮会図書館蔵本（神習文庫）の奥書に貞治三年（一二三四）二月とある点から、それ以前に成立していたことがわかり、『小夜衣』は『風葉集』⁽⁷⁾成立の文永八年（一二七二）以降から貞治三年（一二三四）までの約九十年の間に成立したと考えられる。

以上のことから、現存本『しのびね』と『小夜衣』との成立時期には非

常に大きな隔たりはないと考えられるものの、『小夜衣』における男女双方の形式・内実ともに幸福な状態に至るという結末は、古本・現存本の『しのびね』にはなく、『小夜衣』の独自のものではなかったと思われる。すなわち、『小夜衣』において、姫君が幽閉から解放された後の話筋は『しのびね』とは異なる独自性を持っているのであって、いわば『小夜衣』は『しのびね』に対する〈反逆〉の物語として理解すべきだろう。それは姫君が冷泉院の弟の帝ではなく、冷泉院の子であり、帝にとっては甥に当たる宮と結婚し、いわば甥が帝に勝利したという点においても、〈反逆〉の意味が内在化されているのだといえよう。

おわりに

『小夜衣』は『しのびね』の骨格に依拠しながらも、女君への帝寵による男君の遁世という〈悲恋遁世譚〉で終結させてしまった『しのびね』に対する読者の不満が、宮と姫君との再会と二人の幸福への道程という話筋を要請したのではなからうか。それとは次元が異なるものの、夢浮橋巻が浮舟の薫に対する拒絶で終わってしまったという読者の不満のために、『雲隠六帖』の中の「巢守」「法の師」に見られるごとく、浮舟と薫との再会並びに結婚とが語られている偽書の出現と類似した状況が想像されるのだ。確かに『しのびね』は御伽草子の『しぐれ』などに変奏的に継承されて、〈しのびね型〉と称される作品群を輩出したわけだが、悲恋で終結することに飽き足らない読者側の反応が『小夜衣』のような〈幸福物語〉の創作を要請せしめたのではなからうか。このように考えてみると、前述の「巢守」や「法の師」が創作された状況と『小夜衣』とのそれが類似性を

帯びてくるのではないかと推測される。とすれば、『しのびね』から『小夜衣』への影響とそこからの離反に関して、読者側からの反応を照射する視座を考慮していく必要がある⁽⁸⁾。

- 注(1) 最近では〈しのびね型〉作品から御伽草子に至る文学史的流れを菊地仁〔物語文学とお伽草子 〈しのびね型〉 物語をめぐって〕徳田和夫編『お伽草子 百花繚乱』所収 笠間書院 二〇〇八・11)が述べている。
- (2) 本文は『中世王朝物語全集』により、漢数字は当該ページ数を示す。なお、私に表記の一部を改めた箇所がある。
- (3) 他にも「北の方の、そのあたり(姫君)をば、見じ、聞かじとおぼしたれば、迎へ給はず」(上・三三)とある。
- (4) 大倉『『苔の衣』論―『源氏物語』の新たな〈再生産〉を目指して―』〔学苑〕二〇一〇・1)において、『苔の衣』と『小夜衣』との〈継母〉による〈いじめ〉に対する〈非報復〉に関して若干触れておいた。
- (5) 神野藤昭夫『『しのびね物語』の位相―古本『しのびね』・現存『しのびね』・『しぐれ』の軌跡』〔散逸した物語世界と物語史〕所収 若草書房 一九九八・2。初出、「国文学研究」第六十五集 一九七八・6)
- (6) 大倉「しのびね」〔『中世王朝物語・御伽草子事典』 勉誠出版 二〇〇二・5〕
- (7) 名古屋国文研究会『小夜衣全釈 付総索引』解説(風間書房 一九九九・3)によれば、諸本を二つに分類し、第二類はいずれも『異本堤中納言物語』の題名を持ち、本文が途中で終わっており、奥書を持っているという共通点が指摘されている。
- (8) 読者側の視線をも考慮すべき点に関しては、大倉「〈続宇治十帖創作〉の形成基盤―散逸物語『心高き春宮宣旨』『左も右も袖ぬらす』『朝倉』『川霧』からの照射―」〔学苑〕二〇〇八・3)で述べたことがある。